様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１１８０６

研究課題名（和文）カメルーンにおける定期市ネットワークの社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological study of periodic market networks in Cameroon

研究代表者
坂井　真紀子（SAKAI, Makiko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：７０６２４１１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、カメルーン西部州に現存する８日間周期のカレンダーに基づいて開催される定期市が、地域活性化に与える社会的影響を分析した。この研究の特徴の一つは、地域研究の古典的テーマであった定期市が、当時の予測に反してグローバル化の中で再活性しつつある事例を取り上げ、地域再生のキー概念として新たな意味づけを試みる点であった。さらに、各地域内の事例研究に閉じがちであった従来の地域研究を開放系へとシフトさせ、国際情勢や地域の政治動向とも絡めた複眼的分析を試みる点もその特徴の一つであった。コロナ禍の影響で現地調査は不十分だったが、野菜小売商と定期市サイクルをつなぐバイクタクシーへのアンケートは行えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の結果として、定期市に関わる野菜の小商いの女性たちや定期市をつなぐバイクタクシーの和歌もなど、様々な社会的アクターへのインタビューをとおして重層的な成熟社会の姿の解明する端緒はつけることができた。社会階層の違い、稼ぎ出す現金の多少、活動規模、学歴などにかかわらず、誰もが同じ存在価値を持って生きることができる多様性社会のあり方の一片は少なくとも明らかにすることができたと考えている。この結果は、アフリカの一地域の閉じた事例研究をこえて、行き過ぎたグローバル資本主義によって衰退する「地方」において、再び根を張り社会を活性化するための何らかのヒントをもたらすものである。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the social impact on regional revitalization of periodic markets, which are held according to an existing 8-day cycle calendar in the Western Region of Cameroon. One of the characteristics of this study was to take up the case of the periodic market, a classic theme in regional studies, which is being revitalized in the midst of globalization, contrary to the predictions of the time, and to attempt to give it new meaning as a key concept in regional revitalization. Another feature of this project was that it shifted the conventional regional research, which tended to be confined to case studies within each region, toward an open system, and attempted a multifaceted analysis that also involved the international situation and political trends in the region. Although field research was insufficient due to the Covid-19, I was able to conduct questionnaire surveys of vegetable retailers and bike taxi men.

研究分野：農村社会学

キーワード：定期市　野菜生産　カメルーン西部州　伝統的首長領　バイクタクシー　サブサハラアフリカ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

定期市とは 3～8 日ほどのサイクルで定期的に開かれるローカルの市場のことで、世界各地で観察されている。1960～70 年代に、人文地理学や人類学が積極的に研究テーマとして取り上げたが、その流れは 80 年代前半をピークにほぼ途絶えて現在に至っている。当時は、発展途上国における貨幣経済の導入がどのように定期市システムを発生させたのか、そのプロセスを解明することに主眼が置かれた。段階的社会発展にもとづき、定期市システムは近代資本主義の浸透とともに常設市化し衰退するとの仮説を唱える者がいる一方、経済効率だけでは測れない社会的紐帯や伝統文化の維持など非経済的な要素の重要性を指摘し、淘汰はあっても将来的にも残るべきものとして予測を立てる研究者もいた（石原 1987）。だが、その後の追跡がなされていないのが現状である。

西アフリカにおける定期市は、ナイジェリアやガーナ、コートジボアールなどの豊富な事例をもとに、植民地時代の末期から 1980 年代初等まで盛んに研究が行われていた（Bohannan & Dalton, 1962 ; 石原 1987））。だが現在は研究対象としてほとんど注目されていない。2000 年代に入ってわずかに行政主導の地域開発との関係で論考が出ているのみである。

しかし現在も、定期市が活況を極めている地域が存在する。本研究で扱うカメルーン西部州も定期市のネットワークの活発化が観察できる。この地は、植民地期に導入されたアラビカ種コーヒーの一大生産地として 80 年代まで栄えてきたが(Dongmo 1981)、構造調整政策の導入による市場の自由化の影響を受けコーヒー栽培は衰退した。その後、2000 年代から地域の特性を生かした地元農民たちによる小規模の野菜栽培が盛んになり、既存の定期市（8 日周期）の流通機構が地域を結ぶネットワークとして再活性化している。国際的本流である輸出向け作物の大規模栽培とは一見逆行する定期市再活性化の動きは、グローバル化による変化を取り込みながらも、地域レベルで主体的に生きる地域住民主導の重要な動きであると考える。

２．研究の目的

本研究は、定期市を基盤とした流通機構が、グローバル化時代の新しい文脈の中で、いかに地域の（再）活性化に寄与しているかを明らかにするものである。主な調査対象地域は、カメルーン共和国西部州である。自由主義的資本主義の浸透とともに、先進国では地方の衰退が深刻な問題となっている。他方、アフリカにおける都市と農村の関係では、そうした国際的な潮流とは一線を画した地域の小規模な農業生産と消費のサイクルが地元に活気を与えている事例が多く観察される。本研究では、その要と目される定期市に焦点を当て、特に野菜などの農産物流通を中心とした地域活性化のメカニズムと社会関係資本の関係を検討する。

３．研究の方法

当初は以下のような研究方法を予定していた。

（1）　文献研究を中心としたカメルーン西部州の定期市の変歴史的時間軸への位置付けをベースに、市役所等管理当局の資料調査と関係者へのインタビューを行い、現在の定期市の活性化がどのような契機で始まったのか、歴史的・地理的な観点から検討する。

（2）　調査対象とする定期市（中心部ｘ１、周辺部ｘ３~ ４）を特定したのち、GPS による地図の作成、出店状況、農産物を中心とした商品の種類と出荷量などをおこない、そのメカニズムの空間的・物量的状況を把握する。

（3）　調査対象市の周辺部の野菜生産地の現地調査を行い、土地の利用方法、生産状況、生産者の定期市利用状況などを検討する。

（4）　インタビューによる定期市にかかわる様々な社会的アクター（生産者、卸売、野菜商、運搬業者／バイクタクシー業者など）の多様性とそのネットワークの構築状況を明らかにする。特に女性の野菜小売商と生産者の関係を中心に、地域住民の様々な関わり方と互いの人的ネットワークが、どのように定期市の特色と結びついているのかに注目する。

しかしながら、コロナ禍の影響で 2020 年以降現地調査が不可能となったため、（2）の調査は行うことができなかった。

４．研究成果

（1）調査地の概要

カメルーン共和国西部州の北東部に位置するメヌア県チャン市は標高 1100～1300m にあり、高

原型の気候で涼しく雨の多い地域である。人口約 285,764 人（2005 年統計）、主要民族はバミレケといわれる人びとである。調査地のチャンでは、イェンバ語が主要言語だが、同じメヌア県の中でも地域によって使用されている言語は大きく異なっている。

伝統的には、人々は外から押し付けられた「バミレケ」というくくりではなく、各自の首長制社会（La Chefferie）に対してもっとも帰属意識を持っていたようであるが、現在は「バミレケ」を自称し、地域外へ移住し、様々な分野でカメルーン経済の中心を担う人びとが生まれている。

この地域は、冷涼な気候に加え土地が稀少だったため、植民地初期から土地の現金による売買が発生していた（Dongmo 1981）。早くから現金が生活に介入していた状況に加え、バミレケの人々が資本主義原理を最大限に活用し世界各地で起業家精神を発揮している状況の根底には、こうした土壌があったと思われる。

この地域は、フランス植民地時代に換金作物としてアラビカ種のコーヒー栽培が導入され、かつては一大生産地として栄えた。独立後も、この地域の産業はコーヒー栽培に大きく依存していた。その一方で、メヌア県一帯やその東のバムン社会のフンボット市周辺などでは、ヨーロッパ人の指導による野菜栽培が早くから行われており、80 年代には都市化に欧州野菜を食べる習慣が地元中間層に受け入れられた(Champaud 1983:226)。

1980 年代後半から 1990 年代にかけて、コーヒーの国際価格の下落、構造調整政策の導入に伴う市場自由化の波など様々な要因が重なり、コーヒー生産は著しく落ち込んだ。1990 年後半から、多くの農民たちはコーヒー栽培から撤退し、この土地の恵まれた気候を利用して様々な野菜、イモ類、穀物などを生産し、地域内外に広く販売するようになった。コーヒーの生産・販売が、すべて国家主導の組合を通して組織的に行われていたのに対し、野菜の栽培と販売は、一部フンボットなどでの組合や民間企業の介入が見られるものの、それ以外は個々人が自分の裁量で自由に行っており、比較的組織化されていないところに特徴がある。

（2）伝統的首長領と 8 日間カレンダーの関係

バミレケ社会に残る伝統的な首長制（Chefferies)と定期市は深い関係がある。古くは伝統的首長が、自ら治める地域において定期市を主催し、地域の食料の需給をつかさどっていた。バミレケ社会は祖先崇拝に基づく独自の宇宙観を持ち、首長領を中心としたコミュニティを形成している。その宇宙観とは、生者が住む見える世界と死者（祖先）が住む見えない世界の融合である。定期市はこのバミレケ首長領の見取り図の中で重要な位置を占めている。

市場は、首長領の行政区と居住区の中心にあり、まさに生者たちと祖先の世界が出合う場所だと考えられている。定期市は、バミレケの 8 日間カレンダーに基づいて、一週間に 1～2 回の周期で開催され、そこで農産物、香辛料、魚肉類などの食料品や、日用品、工芸品などが売買される。市場は、社交的賑わいの中心でも在り、文化的な場でもある。そこでは様々なイベントに合わせたセレモニーを行う。人々はもちろん商売のために集まるのだが、その機会を利用して他の住民と顔合わせ情報を交換するためでもある。首長領の市場は首長の権限のもとにあり、商売する者は売り台の賃貸料や商売のための登録料を支払う義務があったが、植民地支配下ではその権限は統治者に奪われていた。

（3）西部州チャン市をめぐる定期市のメカニズム

バミレケの地域では、各地の現地語で定められた 8 日間周期の定期市が開催される。チャン市を中心とした周辺地域では、現地語のイェンバ（Yemba）のカレンダーが使われている。通常の 7 日周期のカレンダーと 1 日ずれるため、定期市の日程を確認するための手帳型のイェンバ語カレンダーが 100CFA で売られている。ヤウンデやドゥアラ等の大都市へ行く大型バスの発着所の雑貨店でも入手可能であるが、長距離バス内に行商人がカレンダーを販売しに来る場合もある。また各定期市の開催日には、様々な言語のカレンダーを売り歩く専門の商人もいる。バミレケランドでは十数に及ぶ言語が話されており、その方言も多岐にわたる（野元 2005:37）。これらの地域言語のカレンダーもイェンバ語と同様に 1 週間が 8 日間構成となっている。この市場カレンダーの裏表紙には、地域の首長の即位年のリストが印刷されており、定期市と伝統的首長制との深い関係を示唆している。

（4）定期市を通した野菜の売買

(a) 生産者の出荷

アンケートを実施したのは、生鮮野菜をはじめ農産物を売っている マルシェ B, Tsinfam, Le Lefock（長距離バス発着所）, Le Pont CAPLAME, Foréké （旧バスステーション） の 5 箇所である。このうち、前述のイェンバ語の定期市カレンダーに組み込まれているのは、マルシェ B だけである。4 日ごとの大市場（Grand Marché : GP）と小市場（Petit Marché :PM)、この両日は普段よりも近隣からより多くの人々が集まる。さらに、これらの日が 7 日周期の日曜日と重なると大変な賑わいとなる。こうした定期市ネットワークのスケジュールに合わせて、生産者は畑仕事と市場への出荷日を決める。

1990 年代までは交通事情が大変悪く、山岳地帯の生産地からの出荷には困難が伴った。山道は狭く、タクシーや小型トラックでは到達できないため、農民は主要道路まで徒歩で農産物を運んだという。農産物の多くが出荷できずに廃棄されることもあった。だが 2000 年代になって、中国製の安価なバイクの輸入が状況を一変させる。無職だった多くの若者がバイクタクシー業を営むようなり、農産物を出荷することが容易になった（Sakai 2019; Sakai 2020）。山岳地帯の生産者たちは、定期市の立つ日の早朝にタクシーやバイクをチャーターし、各々の生産物を運搬し小売商に商品を卸している。その中間に仲買人を立てる場合もある。

現在、農産物の生産から販売までの一連の過程は、その規模においても空間的広がりにおいても多様である。都市近郊の生産者が自ら地域の市場に商品を運び売りさばく、小売商へ卸す、長距離バスやトラックを利用し首都ヤウンデや商業都市のドゥアラへ送るなど、様々なケースが観察できる。

（b）野菜小売商の仕入れ方法

市場での生鮮野菜、穀物などの食糧の小売りを担う女性たちは Bayam Selam と呼ばれる。彼女たちの商売の仕方は一様ではない。彼女たちは社会階層の中で下方に位置付けられるが、その中にも格差が存在する。商売の形態は大きく 3 つに分けられるが、その違いが経済的な格差を計る指標になりうる。1 つ目は、市との契約で賃借料を定期的（毎月）に支払い、市場の倉庫と販売台を借りるもの。2 つ目は、日割りの場所代を支払って決まった場所でござを敷いて商売をする。3 つ目は、商品をトレイに並べ、頭上に乗せて売り歩く形態である。この場合は市に場所代等を支払わずに済む。市当局は「最下層の女性たちに対してあえて厳しく取り締まることはしていない。」という。野菜商の扱う農産物には区分があり、各自が専門領域を持っている。

女性商人たちは自らの資金規模に対して、商品の日持ちの長さ、生産地との距離、仲買人との関係などの様々な要素を考慮した結果、これらの区分の中で自分に最も扱いやすい商品を選んで商売をしている。

(5)まとめ

本研究では、カメルーン西部州の伝統的定期市がグローバル化する現代の文脈の中で再活性化する状況を調査し、行き過ぎた資本主義におけるオルタナティブな存在意義を明らかにすることが目標であった。コロナ禍による渡航制限で現地調査の機会が予定に比べて大幅に失われたが、これまでの調査内容の蓄積をまとめることができた。さらに、考察の方法として、スーパーマーケットの属性と地域に根ざす定期市とを比較することで、競争を旨とする資本主義ルールのみに縛られず、様々な立場の人々が居場所を見つけることができる多様性を確保する「場」としての社会的機能について焦点を当てることができた。この結果を受け、さらに対象地域を広げて研究を発展させていきたい。

【参考文献】

Bohannan, P. & Dalton, G. eds. (1962) *Markets in Africa,* Northwestern University Press.

Champaud (1983), *Villes et Campagnes du Cameroun de l'Ouest*, Paris, Editions de l'O.R.S.T.O.M.

Dongmo, Jean-Louis (1981), *Le Dynamisme Bamiléké (Cameroun) Volume I « La maîtrise de l'espace agraire »*, Thèse de Doctorat.

石原潤 (1987) 『定期市の研究』名古屋大学出版会

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Makiko SAKAI	４．巻 -
２．論文標題 Characteristics of Bike taxis in African rural society -A case study of Dschang, West Cameroon	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Discussion Paper, Fondation France-Japon de l'EHESS	６．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Makiko SAKAI
２．発表標題 Periodic Market Networks as a hub for local resource management　- A case study of West Cameroon -
３．学会等名 “Joint Seminar of State and Rural Resource Management in Africa”, University of Ghana（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 坂井真紀子
２．発表標題 カメルーン西部州における定期市と伝統的首長領
３．学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会（広島大学）オンライン
４．発表年 2021年

１．発表者名 坂井真紀子
２．発表標題 カメルーン英語圏の帰属をめぐる紛争の歴史
３．学会等名 世界史セミナー（東京外国語大学・海外事情研究所）
４．発表年 2020年

１．発表者名 坂井真紀子
２．発表標題 カメルーン西部州における野菜販売網とバイクタクシー～中国製バイクのインパクトを考察する～
３．学会等名 日本アフリカ学会第54回学術大会@北海道大学
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Motoki Takahashi, Shuichi Oyama Heriinjatovo Aime Ramiarison (ed.)	４．発行年 2021年
２．出版社 Langaa RPCIG	５．総ページ数 409
３．書名 Development and Subsistence in Globalising Africa Beyond The Dichotomy	

１．著者名 杉山祐子編	４．発行年 2024年
２．出版社 弘前大学学術出版会	５．総ページ数 -
３．書名 農村の人びととお金のかかわり：アフリカと日本にみる「共」の再編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Makiko Sakai (2024), Les Marchés périodiques chez les Bamiléké, Région de l'ouest, Camerun, 最終報告用写真集（英仏版）：132p.

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関